２０２２年度

関西学院大学ロースクール

Ｃ日程

一般入試（法学未修者）

特別入試（法学未修者）

論　文　問題

《１０：００～１１：３０》

○開始の指示があるまで内容を見てはいけません。

【論　文　問題】

問題文を読んで、〔設問１〕および〔設問２〕に答えなさい。

〔設問１〕

下線部の「基本的に純度のあるものは、閉じられているから存在できる。」というのは、どういうことか説明しなさい。（２００字程度）

〔設問２〕

私たちの社会は、グローバル化によって大きく変わろうとしている。その功罪とともに今後より適切な方向に社会を発展させていくための方策について、問題文の筆者の見解を踏まえ、あなたの意見を述べなさい。（８００字程度）

問題文

「カビの生えたような学問」という言葉があるが、私がやっているのは「カビが生える学問」である。私が主な研究材料にしている、いもち病というイネの病原菌は、子のう菌という真菌(カビ)に属している。カビの生えたような学問というと、狭く薄暗い研究室で白衣を着た学者が顕微鏡をのぞいているというようなイメージがあるが、この時代にあってカビに興味をもつ研究者というのは、どことなくそれに通じるものがある。アメリカのカリフォルニア州にあるアシロマ会議場で(ここは１９７５年に国際的な遺伝子組み換え実験のガイドラインが打ち出されたことで有名なアシロマ会議が開かれた場所でもある)、２年に１度、世界中の「カビマニア」が一堂に会するFungal Genetics Conferenceという学会が開かれるが、その比較的小さな国際会議の木造の薄暗い会場には、どことなく古き良き時代のサイエンスの芳香が漂っている。

〝開かれたこと〞と〝閉じられたこと〞

今さら言うまでもなく、現代では自明の善としていろんなことが開かれていく方向に進んでいる。〝開かれたこと〞つまり情報の交換や物質の流通などが、物事の健全な発展のために必要なことは論を俟たない。そういう意味では、この時代は過去と比べて本当に恵まれていると思う。大陸間の移動でさえ、豊かな国では普通の庶民が無理なく行えるようになり、欲しいと思う情報のほとんどはインターネットやテレビなどの通信手段によって手に入る。こういう〝開かれたこと〞が現代社会の基礎を作り、その発展に大いに寄与していることは、もう圧倒的に明らかなことである。

けれど、一方で私が最近とみに思うのは、もっと〝閉じられたこと〞というものの大切さが意識されても良いということだ。昨今の風潮は、〝閉じられたこと〞の持つエネルギーや密度について、あまりに無頓着になっているような気がする。開かれたということを、誰の目にも見て分かる〝昼の力〞とするなら、閉じられたことは、簡単には見えない〝夜の力〞 みたいなものだ。 基本的に純度のあるものは、閉じられているから存在できる。赤い絵の具を池の中に落とせば、その色はなくなってしまう。どんなものであっても、その偏りや純度を保つためには閉じられた時空間が必須だ。そのことの意義は意外に大きいと思う。

その文脈で言えば、昔、日本は島国で鎖国までしていた。その閉じられた時空間の中で、日本の文化というのは育まれてきた。ちょんまげや羽織袴、刀、お城そして日本語、そういうものが、その文化の中である種の密度を持ち存在した。しかし、明治以後、多くのものを開き、西洋文化を取り入れてきたことで、たとえば着物文化というようなものは、その内在的な文化としての何か大切な力を失ってしまったように見える。こんなことを言うのも不謹慎かも知れないが、以前は、もし日本という国が圧

倒的な軍事力を持ち、世界を席巻していたら、世界のみんなが着物を着るようなことになっていた、そんな未来の世界の姿の一つとなる可能性を内包する密度と力を持って存在していたと思う。しかし、残念ながら現在ではすでに着物に、そういった未来の世界の姿を担うだけの密度はないような感じがする。垣根を取り払い開かれたことで、相対的に弱い文化が密度を失い力をなくしていく。この日本語という言葉も、日本人の英語下手という壁に守られ、現在はまだ生命力のある言葉として存在しているが、幼い頃からの英語教育が盛んになり、大学の授業は英語だ、社内の公用語は英語だ、といった状況が進んでいけば、かつてのネイティブアメリカンやマヤの人たちの言葉が実質的に失われていったように、日本語という文化も一部の収集家によって保存されるだけのものになっていくのかも知れない。英語を第二公用語にしようというような話が持ち上がる我が国であるから、それもまったくあり得ない話ではない。

〝閉じられたこと〞の持つ力

もちろん着物も日本語もローカルな文化で、そんなものに執着する必要はないという人もいるだろう。私も特に着物を着たいとは思わない方だが、私がここで問題としているのは、文化的アイデンティティーとか愛国心とか、そういうこととは少し違う。たとえばガラパゴス諸島やオーストラリア大陸で、独自の進化が起こり、我々から見ると奇妙な生物たちが繁栄したのは、これらの地域が地理的に隔離されていたことが最も重要な要素だったことは疑う余地がない。〝閉じられたこと〞が、その時主流となっている事象と、その亜種や改良版ではない、まったく違った形の生き物や文化を生む母体となっているのだ。〝閉じられたこと〞には、そういう力があるのではないかと思う。

何の形も境界もない混沌の中から、何かが形を作っていく時。そしてそれが醸熟し、萌芽していく時。そこでは、わずかな風が外から吹き込むのも嫌がるような、外界とのつながりが一旦遮断された、濃密で、閉鎖的な時空間が必要とされることがあるのかも知れない。そういえば子宮もある意味、閉じられた空間だ。そのイメージの延長線上にある。

こういった考え方は、本当に新しいものが求められる芸術の世界では古くから大切にされてきた。秘められた感情、抑圧された情熱、そういった簡単には人に話せない、心の奥に封じ込まれた物語が洗練され、閉じられた空間から一気に日の当たる場所に解放される時、多くの人を感動させる力を持った芸術になる。〝閉じられたこと〞が生む、ある種の偏り、純度の高さ、内圧のようなエネルギーの蓄積。描いては消し、消しては描く、その無駄で贅沢な作業。そして〝小さな世界〞の genesis。

閉じられたことは、育てること、に通じている。他と混じってしまえば、蹴散らされてしまうようなもの、色が消えてしまうようなものが、閉じられた空間だからこそ

成長でき、成熟し、ある種の「世界」を作りあげることが可能となるのだ。

グローバリゼーションのもたらすもの

グローバリゼーションだ、グローバルスタンダードだと言うが、あらゆるものを混ぜて競わせれば、その結果、生き残るのは競争力や戦闘力という〝偏った特徴〟が強いものばかりになる。競争で選抜されるのは、実は限られた観点から見た優位性である。戦争に強い民族が、常に病気に強い訳でも、絵が上手い訳でも、足が速い訳でも、他人への思いやりに溢れている訳でもない。一つの観点で強い選択圧をかけてしまえば、その陰で多様で独自の特色を持った多くの形質が失われてしまいかねない。

あるいは経済で言えば、「消費者により良いものをより安く届ける」ことが天上天下唯一無二の正義のように言われているが、より安くを追求すれば、最も優れた企業とは、人件費がゼロ、つまり奴隷を使う企業である。社員を、あるいは国民を、どこまで奴隷に近づけることができるか、そんな競争をしてはいないだろうか？非関税障壁はなくすべきだ、みんなが同じように競争し、容易に理解し合えるようにすべきだと言えば、世界中の言葉は英語だけでいい。独自の文化は基本的にすべて非関税障壁である。ほんのちょっとばかり安いものを手に入れるために自分たちの文化を捨てるべきかどうか、少し頭を冷やして考えれば、すぐに分かることではないか？

人類は、ある意味、世界の各地にある小さな閉じられた空間の中で、多くの独自の文化や社会の豊かさを育んできた。かつては世界のあちらこちらに、閉じられた袋があり、それを開けるたびに独自の文化や物語が見つかり、そこに新鮮な驚きがあったのだ。それらは長い時間をかけて、その場所で、醸成されてきたからこそ独自のものだった。世界が開かれ、世界中の子どもがディズニーしか見なくなったとして、そこに本当に新しい物語を作る力が、果たして残っているのだろうか？

「カビが生える学問」

そして今、大学もそういったグローバル化の中にある。今の大学は〝閉じられた時空間〟などという贅沢なものと本当に無縁の世界になっている。何かが育つのを待つようなゆっくりとした時間や空間はない。たくさんの情報が流れ込み、それに対する多くの出力がすぐに要求される。目の前にあることをとりあえず「こなす」ことで、時間が過ぎてゆく。一つ一つの事項を取れば、文句を言う筋合いはない「必要で大切な」案件が並ぶ。しかし、これが全体として見れば、まったく不毛で本末転倒なことに限りなく近づいているのは、一体どうしてなのだろうか？

昼と夜が交互に来るように、洪水のように流れてくる情報を、もう一度静かな、小さな空間の中で動きを止め、遅々としていても密度のあるものに練り直す、そういう作業が可能だろうか？そのために私たちは何をするべきなのだろう？

カビの胞子が発芽する。菌糸が伸びて、ビロードの絨毯のように幾重にも重なった、びっしりとした菌糸のマットが少しいびつな円形のコロニーを作る（図７）。先端の白い菌糸から内側の灰色の菌糸へ移相するグラデーションとその僅かな菌糸の濃淡が規則的な幾何学模様を作り、その上に白い気中菌糸が立体的で規則性の捉えがたい複雑な形を描いていく。わずか直径９センチメートルのシャーレの小さな閉じられた空間で、カビが「世界」を作っている。シャーレのフタを開けた時、吹き出すような香りがする。「カビが生える学問」の薫りだ。

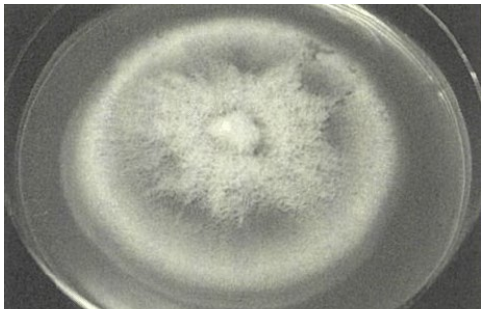

図７.*Pyricularia oryzae*の培地上のコロニー

（以下略）

中屋敷 均「科学と非科学　その正体を探る」（講談社現代新書、２０１９年）より抜粋。出題との関係で必要な補足、省略、変更を施している。

2022年度入学試験　出題趣旨・解説・講評
【C日程：論文】

≪出題趣旨≫

グローバル化には、社会や科学を発展させるという側面がある一方、これによる弊害が生ずることもある。本問は、筆者の専門的分野の特徴を交えながら、グローバル化の功罪を考える文章を素材として、読解力、思考力及び文章表現力を試そうとするものである。

≪解説・講評≫

１【設問１】について

設問１は、比較的抽象度が高い下線部を契機として、著者の論旨に対する理解度を問う問題である。

（解答例）

ここでは、「純度」とは、外界から切り離された空間、時間の中で存在した独自の文化や個性のことをいう。このような純度は、外界とはつながらない閉じられた時空間であってこそ、少しずつ形成され、熟成され、独自のものとして保たれる。グローバル化によって異質なものが混じると、相対的に力の弱い純度あるものは、異質なものの中に溶け込んでしまって、純度が薄まってゆき、独自性が失われて見えなくなるということ。（１９５字）

２【設問２】について

設問２は、筆者の問題提起を理解した上で、これに対し、自分の意見を論理的に説明できるかを問う問題である。

まず、グローバル化についての筆者の問題提起を明確にすることが求められる。その上で、自己の見解を展開することが求められる。筆者の見解に対して積極、消極いずれの立場にたって論述を展開してもよいが、一貫性を有することが求められる。

（解答例）

日本国内だけでなく、世界の国々や人々と情報のやりとりをしたり、物資の流通を図ったり、さらには、国境を越えて行き来したりすることによって、物質的に豊かになり、科学技術が発展し、それに伴って社会が発展してきた。鎖国から開国に転じたことで、日本は近代化を果たし、社会を発展させた。現代では、インターネットなどの通信手段が世界中に行き渡ったことで、日本にいながら他国の情報を知ることができ、世界各地の物品を手に入れることもできるようになった。反対に、日本の情報や

物品を世界に発信、発送することもできるようになった。

他方で、グローバル化によって失われたものもある。世界の各地で長い時間をかけて作り上げられた独自の文化が､他の文化を取り入れることによって､独自性を失い、均一化されてしまう。しかも、特定の力が強いものが他を席巻して、相対的に力の弱いものが失われてしまい、元に戻せなくなる。その結果、多様性が失われて、独自の文化が消滅することもある。現に、ネイティブアメリカンやマヤの人々の言語が英語やスペイン語の陰に消えてしまった。

今や、どのような分野にもグローバル化の波が押し寄せている。この状況でよりよい社会の発展のためには、グローバル化と独自性の維持とのバランスをとりながら、多様性を確保することが肝要であると考える。グローバル化によって押し寄せる情報や物資を目的に照らして吟味し、グローバル化を推し進める分野と独自性を維持する分野を明確にする必要がある。社会全体を効率的に発展させるためには、世界で統一的な基準を設けるのが効率的であるかもしれない。しかし、それは一点において強靭であっても他面においては脆弱なものであるということが起こりうる。対して、多様であることは非効率にみえても、状況の変化に柔軟に対応できる可能性がある。健全な社会を維持するために、多様性やバランスを常に検討すべきである。（７９５字）

３　全体の講評

いずれの設問についても、読解力、文章力に大きく差がついた。たとえば、設問１では、問題文の中から適当に文章を拾い出し、羅列するものが目立った。一方で、純度や閉じられているということについて、自分のことばで説明しようとするものがあった。後者については高く評価できる。また、設問２では、問題文を理解せず､「筆者の言いたいことを踏まえて」という点が全く抜け落ちているものなどは、低い評価しか与えられない。反対に、著者の論旨を的確に踏まえた上で自己の意見を展開した答案については、高い評価がされた。

なお、一文が大変長い答案が多かった。特に設問１では 200 字を一文で答えるものもあった。文章が長くなると、得てして意味不明となる。1 つの文には 1 つの主語･述語とし、1 つの意味を持たせるよう心がけてほしい。

以　上